

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 98

学校名・団体名	広島市立三入東小学校
HPアドレス	http://www.miirihigashi-e.edu.city.hiroshima.jp/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	小学校段階における Death Education のカリキュラム研究
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>道徳の授業を中心に、「生命の尊さ」についての理解を深める様々な取り組みが小学校において行われている。これまで、「生命の大切さ」を考える取り組みは様々行われてきたが、「死」について正面から向き合った授業はあまりない。死をテーマにした授業を、欧米では Death Education と呼び、小学校段階からの取り組みが行われている。</p> <p>小学校段階において Death Education に取り組むとしてどのような実践が可能か、小学校段階でのカリキュラム作りを目指した研究をまとめたものである。</p>	

1. 取り組みの経緯

「生命に対する畏敬の念」を培うことは、道德教育の目標の一つである。それは、「人間の存在そのものあるいは生命そのものの意味を深く問うときに求められる基本的精神であり、生命のかけがえのなさに気づき、生命あるものをいつくしみ、畏れ、敬い、尊ぶことを意味する」(学習指導要領解説 道德編)。

そのため小学校では道德の時間を中心に、生命の大切さを考える授業を行っている。

これまで、「生命の大切さ」を考える授業は様々行われてきたが、その裏返しである「死」について正面から向き合った授業はほとんどない。死をテーマにした授業を、欧米では **Death Education** と呼び、小学校段階から、様々行われている。一方日本では核家族化が進み、祖父母や祖祖母などの身近な存在の死に、深く関わるのが減ってきている一方、「死ね!」という言葉が日常的に使っていたり、「命は一度死んでも生き返ることができる」と考えたりしている子供が年々増えてきている。こうした子供たちの環境において、**Death Education** に取り組んでいくことは意義あるものと考ええる。

これまで、小学校段階においてどのような実践が可能か、小学校段階でのカリキュラムを提案できるよう研究と実践を重ねてきた。その中で、「死」について正面から向き合う授業の大切さを実感することができた。その一方、書籍や他人の経験からではなく、生身の人の成長を実感できたり、生命の重みを実感できたりする授業の大切さも感じるようになった。「死」について正面から向き合う授業だけでは、どうしても授業が重たくなり、生の喜びや尊さから遠ざかってしまうのだ。**Death Education** のカリキュラムの中に、そのような要素を取り込みたいと考えていたところ、「赤ちゃん先生プロジェクト」を知り、取り入れることとなった。

2. 活動内容

(1) 対象者 3年生(38名)

(2) 教科 総合的な学習および道德

(3) ねらい 小学校段階での **Death Education** のカリキュラム作成。人の死を初めて取り扱う3年生のカリキュラムを本年度は主に検証する。

(4) 活動の特色

3年生の **Death Education** カリキュラムの中に、人の誕生からの1年間の成長を見守る「赤ちゃん先生プロジェクト」を取り入れる(全5回)ことで、死について学んだことによって生じる不安を、前向きに解消することができるのではないかと考えられる。

【赤ちゃん先生プロジェクトとは?】

NPO法人ママの働き方応援隊が提供する、実際に赤ちゃんに触れ合ったり、赤ちゃんの母親から生まれてきたときの話を聞いたりする授業プログラムのこと。定期的・継続的に開催することで、赤ちゃんともどもたちとの間に愛着形成が生まれることも特長の1つである。

各授業においては赤ちゃんが先生(=赤ちゃん先生)となり、赤ちゃんの母親(=ママ講師)が、赤ちゃんたちの共感力を引き出す役割として同席する。具体的には、児童に9~10人ほどの輪になってもらい、その輪の中に赤ちゃん先生とママ講師が1組ずつ入る。そこで赤ちゃんを抱っこしたり、一緒に手遊びをしたりするなどの触れ合い体験や、グループトークが行われる。

(5) 活動時期および内容

3年生の **Death Education** カリキュラムは、赤ちゃん先生プロジェクトを加えて全7回開催する。(月1回の程度)

① 5月 赤ちゃん先生「自分はどれだけおおきくなったかな」(総合的な学習)

…赤ちゃんとおおきさを比べることで、自分の成長を知る。

<<開催後>> もともと興味があることに対して集中力を発揮する学年だが、この日は特に集中して授業に臨んでいた。赤ちゃん先生の母親であるママ講師からは、「児童たちが赤ちゃんにとっても興味を持って接してくださり、次回会えるのがうれしい」という感想が出た。赤ちゃんの持つ力は大きい。

② 6月 「わたしのいもうと」(道德)

…いじめが死にかかわっていくことがあることを考える。

③ 9月 赤ちゃん先生「赤ちゃんとお話しよう」(総合的な学習)

…言葉の持つエネルギーを知る。言葉を話せない赤ちゃんの気持ちを読み取ろうとする。

<<開催後>> 人見知りしたり、泣くことで自分の思いを表現しようしたりする赤ちゃんの表情を読み取ろうと児童は赤ちゃんに積極的にかかわっていた。赤ちゃんへの愛着を持ち始める姿が見られた。

④ 11月 赤ちゃん先生「泣いてもいいんだよ」(総合的な学習)

…泣くのは悪いことではなく、表現の1つであると知る。赤ちゃんがどうして泣くのかみんなで考える。

<<開催後>> 歩くようになったり、話すことができるようになったりと、初回からの赤ちゃんの成長に児童が気付くとともに、愛着の形成が進んでいる姿が見られた。

⑤ 12月 赤ちゃん先生「いのちのちから」(道德)

…赤ちゃん先生の妊娠・出産時のエピソードを共有する。みんなが奇跡的に生まれてきた1人なのだと感じてもらう。

<<開催後>> 母親からの妊娠時や出産時のエピソードに、命が誕生することへの重みや不思議さを感じ取っていた児童がいたことを感想から読み取ることができた。児童自身の名前の由来や出生時の体重などを語る児童もいて、自分の生について思いを巡らすことができていた。

- ⑥ 2月 「恋ちゃんはじめでの看取り」(道徳)
…同年代の子が体験した看取りの場面を追体験する。
- ⑦ 2月 赤ちゃん先生「みんなの未来」(総合的な学習)
…未来の赤ちゃん先生たちに手紙を書いて、読み上げる。自分や他者の未来を大切に感じられるようになる。

<<開催後>> 赤ちゃん先生に手紙を書くことで、自然と1年間を振り返ることになり、赤ちゃんの成長と生について意識することができた。看取りの場面との対比で生について考えることができた児童もいた。

3. カリキュラム構成について

カリキュラム作成に当たっては、生活科や理科などの教科との関連を考慮した。

また、各学年で授業を行う際、[絵本の世界→人の世界]という流れにし、現実世界とのつながりを大切にしたい。

資料1

「子供の発達のまとめ」 Ver. 1

死の概念の形成と授業

	2歳	3歳	4歳	5～6歳	7歳(1年生)	8歳(2年生)	9歳(3年生)	10歳(4年生)	11歳(5年生)	12歳(6年生)	13歳～15歳(中学期)	
ピアジェの認知発達理論	【前操作期】 表象的機能が出現し、それを基礎として言語が習得される。思考は伸びていくが、その思考は可逆的(思考の最初の出発点に戻る)にはならない。一貫性を欠く。認知面でも情意面でも、保存の欠如がみられる。場面の知覚的・表象的配置に左右されやすいため、様々な場面での一貫した思考にならない。主観と客観も分化していない。そのため、自分が自分の行為に主観的価値を込めているのと同じように、相手もその行為に主観的価値を込めていることが十分に分かっていないため、表面的な結果のみで判断したり、規範を変えたりする。				【具体的操作期】 思考の可逆性の獲得。見かけの背後に一定の普遍的保存を認識できるようになる。主体の状況、場面の状況、相手の状況の変化に関わらず、一定の価値を保存しようとする働きが、子供の中にあらわれる(意志)。認知に体系的な構造が備わってくる。個々の思考が1つの体系に組織化される。ただし、具体的な現実性しか考えることができない。物事を一般的あるいは形式的に考えることができない。一度現実を離れて可能なことを考えることができない、という制約がある。				【形式的操作期】 現実や具体的内容の束縛から自由になり、仮説演繹的方法がとられる。組み合わせ的思考が可能になる。イデオロギー的感情が芽生え、人生における自分の人格というものを位置付けるようになる。将来の職業的役割や職業選択にない方向付けを行うようになる。			
「死」の概念	死の不可逆性を理解できず一時的なものとしてとらえる。死んでも別の環境で生きていると思いき、生きていることと「生命がないこと」を区別できない。				死は最終的に誰にでも起こることを理解するが、自分の身には起こらないと考える傾向。死を理解しているが、自分とは距離をおいてとらえようとする。死は不測の事態であり、自分とは関係がないと考える。				死の最終性、普遍性を理解し、死の概念がほぼ成熟したものとなる。死は自分自身にも訪れるものであり、死は避けられないものであり、肉体的生命の消失であることも理解できるようになる。			
教育要領・学習指導要領解説「道徳編」から	身近な環境とのかかわりに関する領域				3 主として自然や崇高なものとかかわりに関すること							
Death Educationのテーマ	(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。 …実際に世話をすることによって、いたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを育てる。				(1) 生きることを喜び、生命を大切にすることを大切にする。 …生活経験の中で生きていることを感じることが中心。		(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。 …現実性を持って死を理解できること。特にこの時期に、生命の尊さを感得出来るように指導する必要がある。		(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。 …生命の誕生から死に至るまでの過程を理解することができる。		(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。 …人間の生命のみならず身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊厳に気づかせ、生命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の意を持つよう指導すること。ことに感謝の意をもつよう指導する。	
授業に活用できる教材(絵本と実体験)	M.W.ブラウン『ちいさなとりよ』(岩波こどもの本) ハンス・ウィルヘルム『ずーっとずーっとだいたすきだよ』(評論社)『いきものとなかよ』(生活科から)				絵本『ゆり子』(金の星社)『大きくなった自分のお母さんに、誕生の喜びを聞く。』		松谷みよ子『わたしのいもうと』(偕成社) 國森康弘『恋ちゃんはじめでの看取り』(農文協) 赤ちゃん先生プロジェクト		大塚敦子『さよならエルマおばあさん』(小学館) テレニョウ子『ママからの伝言 ゆりちゃんへ』(書肆侃侃房)		ローレンス・ブルギニョン『さいじょうぶだよ、ソウさん』(評論社) スーザン・パーレイ『わすれられないおくりもの』(評論社) 加藤浩美『たったひとつのたからもの 息子・秋雲と秋の六年』(文藝春秋)	
「死」の受容のプロセス	①否認…自分がそのような病気のはずがない、何かの間違いであると「否認」する		②怒り…その現実が代えられない現実であると認識し、なぜ自分なのかと怒りをあらわにする段階。		③回避…いくら怒っても現実が変わらないと認識し、何とかならないかと、例えば善行を行ったり、その状態を回避しようと取捨する段階。		④抑うつ…状況が何も変わらないことが分かって、深い絶望から陥る抑うつ状態。		⑤受容…最終的に死を受け入れて受容する段階。			

4. 成果と課題

各学年で、[絵本の世界→人の体験]という流れで授業に取り入れることで、無理なく授業のテーマを考えることができた。また、3年生では初めて人の死をテーマにしたが、同時に[赤ちゃん先生プロジェクト]という生の誕生場面に触れることで、死の重みを感じながらも、生の感動や喜びを児童一人ひとりが味わうことができ、バランス良いものになったと感じる。一方、[赤ちゃん先生プロジェクト]は、より成長し、大人に近づいてから体験することにも意味があると感じた。できれば、中学3年生ぐらいで再度体験することができると、小学校3年生とはまた別の重みで受け止めることができると感じた。